25 journal
society&business Tokyo25 journal
執筆協力 編集室システムU　okamura.nobuyoshi@gmail.com

陸上競技支え40年

底辺拡大へかけっこの魅力発信

東京陸上競技協会事務局長 森田光二さん　青梅市天ケ瀬

陸上競技の振興に力を注ぐ東京陸上競技協会事務局長の森田さん

青梅市天ケ瀬の森田光二さん（58）は（公財）東京陸上競技協会（千代田区）の事務局長を務める。6月にロサンゼルスオリンピック女子マラソン代表で、陸上競技解説者として活躍する増田明美さんを会長に迎え、新たな体制の下、陸上競技の振興に力を注いでいる。

コロナ禍、昨年から競技会の実施は中止や延期と背中合わせが続いている。こうした中、同協会が主催する第76回国民体育大会東京都代表選手選考会が7月3日、あきる野市の都立秋留台公園陸上競技場であった。三重国体（9月25日～10月）の代表選手を目指し、トラックとフィールドで、男女年齢別36種目で熱戦が繰り広げられた＝写真下。森田さんら協会関係者は安全な進行に心を砕き、無事日程を終えた。

東京オリンピック2020の陸上競技が7月30日から新国立競技場で熱戦を繰り広げた。その晴れの舞台を目指し、6月に行われた日本選手権では男子100㍍、同3000㍍障害、同走り幅跳びなどで全力を出し切った選手の姿は記憶に新しい。舞台は変われども、都代表選手選考会は同協会関係者らの努力で最高の舞台がつくられ、選手たちの熱気であふれた。

■

青梅市立西中学校で陸上競技部部長を任された。4×200㍍で都4位に入賞。八王子高校でも部長を務め、卒業後はOB会を発足させ、会長を30数年務めた。

卒業後は、陸上競技の専門メーカーニシ・スポーツ、ベースボール・マガジン社（陸上競技マガジン）で陸上競技に関わる仕事をした。2009年小学生の誰もが参加できる「第1回ジュニア陸上競技・チャレンジカップ」を同陸上競技協会の協力をもらい立ち上げ、今では1600人が参加する大会に育てた。同カップを機に同陸上競技協会との関りが深まり、16年から協会職員になった。

事務局の主な仕事は、公認陸上競技会開催に向けた準備のほか、マーケティングやプランニング、新たな競技会の企画、陸上競技の魅力発信など幅広い。

森田さんは「約40年間陸上競技を支える場に身を置いてきた。現在小学生の底辺の拡大を目指し、かけっこの魅力を発信したり、東京マラソンをはじめ各種大会の運営に携われることに大いに遣り甲斐を感じている」と目を輝かす。一方で、「選手が競技を引退した後のスキルを活かしたダブルキャリアに取り組み、選手と企業のマッチングを推し進めたい」との強い思いを持っている。

なお、同陸上競技協会は25年に創立90周年を迎え、増田会長就任後はその先の100周年に向け、協会が成すべき事を検証し、変革、挑戦、普及強化、法令順守、組織の管理・透明性をスローガンに歩みを進め始めている。

東京の秘境に村長ありき

父の背中 ■4■

先代の仕事と教え

村制100年を5年後にひかえた1983年4月、中村正巳氏は檜原村長選挙に推され無投票で当選。2期8年にわたって行政の舵取りを担う。その間、過疎化に伴う学校の統廃合、道路やトンネルの整備に尽力した。

「60年代には休眠状態だった桧原農協を組合長として再建。村民から信頼されていたが、家では謹厳そのもの。曲がったことが大嫌いで、私が悪さをすれば鉄拳制裁はあたりまえ。獅子がわが子を千尋の谷に突き落として育てるようなものだったと思う」

長男の甚継（じんけい）氏がこう振り返る正巳氏は大正生まれ。山梨県の都留中学校（旧制）を卒業すると、率先して陸軍を志願。優秀な彼はエリートコースを歩き少尉で終戦を迎える。戦後は自衛隊の前身である警察予備隊に入り、中隊長まで勤め上げた。

「村長になる2年前、父は高齢化が加速する村の行く末を案じて老人ホームの建設を計画した。村の高齢化率はすでに30%を超え、いずれ2人に1人が高齢者になる。老人福祉が重要になることを見込んでの決断といえる」

当時、甚継氏は都内でカメラマンをしていた。しかし、ホームの仕事をするため実家に呼び戻される。甚継氏から見ても高齢化対策は必須。急いで認可準備に取りかかり、同年12月に桧原苑開設に漕ぎつけた。

桧原苑　中村甚継氏

「軍人そして公人として人生を歩んだ父は、常に自分のことよりも地域の問題を優先した。村長選に初出馬するとき『わが家が繁栄するには、こ笛吹（うずしき）や人里（へんぼり）が良くならなければならない。そのためには檜原村が発展しなければだめだ』と語ったのを昨日の出来事のように思い出す」

桧原苑は2012年から甚継氏が理事長の任にあたり、16年に現在の地に建て替えられた。一方、村長を引退した晩年の正巳氏は移転前のホームで余生を過ごした。そこでも、村長経験者らしい凛々しさを失わず職員たちに接していたという。

【岡村繁雄】

脳梗塞、脳卒中のリハビリも

手足の動きが軽くなる

あきるの波多野整骨院

あきるの波多野整骨院（腰痛研究所を併設）は脳梗塞・脳卒中（片麻痺）のリハビリを行っている。波多野良夫院長（65）は「当院では脳梗塞・脳卒中（片麻痺）症状が改善した患者様がたくさんいます。当院の送迎サービスを利用し、来院してみてください」と呼びかける。

脳梗塞・脳卒中（片麻痺）のリハビリは、一般的にはマッサージ療法などの対症療法だけで根本的に解消する治療方法がない。そのためあきらめて症状が改善しないまま一生を過ごす人も多いという。

同整骨院では、全身の血流を活性化するための特別治療機を使い、血流を変えることから始める。その上で手足の指先から肩、腰の関係部位まで施術を行い、徐々に可動域を広げ手足の動きが軽くなるようにする。

手足を動かすことをあきらめていた患者が少しでも動くようになると分かると、もっと動かしたいと意欲を持つようになり、好結果につながっていくのだそうだ。

この治療方法を定期で繰り返し、自立した生活を目指すという。患者の家族も徐々に負担が軽減することもあり、可能な限り元の生活を取り戻せるようサポートしていくという。

診療受付時間は午前8時～正午、午後3時～7時半（土曜は5時まで）。日曜と祝日の午後は休診。☎042（550）3477へ。詳細はホームページで。

あきる野市秋川5-1-2　P5台